【シンポジウム】

ペット・ロスと飼い主の悲嘆 ―援助者にジェンダーの視点は必要か―

東洋大学社会学部社会福祉学科
佐藤　亜樹

【要旨】

本シンポジウムでは、ソーシャルワーク分野ではあまり語られてこなかった「人と動物の関係」に焦点を当て、(a) ペットの飼い主は、ソーシャルワークの援助対象となり得るのか、(b) ペット・ロスによる悲嘆を経験している飼い主への専門的援助の実際について、また、(c) ソーシャルワーカーが持つ男らしさ・女らしさに関する価値意識が、ペット・ロスによる悲嘆を経験している（特に男性）飼い主の行動や感情表出にどのような影響を及ぼすのかについて言及した。

ペットを重要な他者と見なし、そこから情緒的サポートを得ている飼い主にとって、そのペットとの関係を無視した専門的介入は、時としてクライエントの生態系内の重要な社会関係を破壊し、最善のサービスを査定し、提供することを妨げるかもしれない。そのことに留意し、援助を行うことがソーシャルワーク援助職には求められる。また、ソーシャルワーク援助職は、自身の男らしさ・女らしさに関する価値意識を自覚し、男性のペット飼育者にも、女性のペット飼育者に対するのと同様に、もしくはそれ以上に、悲嘆を表出する機会を提供することが求められる。

【キーワード】ソーシャルワークの援助対象、人と動物の関係、ペット・ロスと飼い主の悲嘆、飼い主のジェンダー、援助者の男らしさ、女らしさに関する価値意識

１．研究の背景

ソーシャルワーク専門職は、クライエントの問題解決のために、個人の変容だけではなく、彼らを取り巻く環境そのもの及び環境内の諸要素との関係性を変化させるための介入を行うよう訓練されている。一方で、個人を取り巻く環境には「ペット、食肉、害獣」等の「動物」が含まれているが、ソーシャルワーク専門職は伝統的に、「動物」が人間の幸福（well-being）や生活問題にどのような影響を及ぼしているのかを視野に入れた介入を必ずしも行ってこなかった。

クライエントとペットとの関係をどのように扱うかは、援助の成否に大きな影響を及ぼす（Cohen, 2002; Coren, 1997）。米国の調査研究によれば、ペットの飼い主は、自身のペットから情緒的なサポートを得ており（Anderson & Anderson, 2006; Cohen, 2002; Coren, 1997）、また、ペットを家族の一員として見なしていることが多い（Cohen, 2002; Risley-Curtiss et al., 2006; Risley-Curtiss, Holley & Wolf, 2006）。このような場合、クライエントはペットとの分離を恐れて、専門的援助を躊躇または拒否することがある（Ebenstein & Wortham, 2001; Faver & Strand, 2003a, 2003b）。彼らは自分がストレスフルな状況に置かれても、ペットを手放そうとはしない（Anderson et al., 2006; Cohen, 2002; Coren, 1997）。クライエントとペットとの関係を無視した介入は、時としてクライエントの生態系内の重要な社会関係を破壊し、最善のサービスを査定し、提供することを妨げるかもしれない。

２．研究の目的・方法

本研究では、以下の論点に沿って先行業績を概観し、考察を行う。(a) ペットの飼い主は、ソーシャルワークの援助対象となり得るのか、(b) ペット・

ロスによる悲嘆を経験している飼い主への専門的援助の実際、また、(c) ソーシャルワーカーが持つ男らしさ･女らしさに関する価値意識が、ペット･ロスによる悲嘆を経験している（特に男性）飼い主の行動や感情表出にどのような影響を及ぼすのか。

３．研究結果・考察

(a) ペットの飼い主は、ソーシャルワークの援助対象となり得るのか

2014年､国際ソーシャルワーカー連盟（International Federation of Social Workers [IFSW]）及び国際ソーシャルワーク学校連盟（International Association of Schools of Social Work [IASSW]）は協働で、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義を発表した。その中で、ソーシャルワークの機能を、「…生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける…」と定義しているが、ペット（動物）との関係において課題を抱える人々に（どのような）支援を行うのかについては必ずしも言及していない。

しかしながら、人は生きる上で、絶えず動物と何らかの関わりを持っている。例えば､動物をペットとして可愛がる人もいれば（愛玩動物）、たんぱく源として食べることもあり（家畜動物）、また生活に害を与えるものとして処分する場合もある（害獣）。このように「人と動物との関係」は、一人の人間の中でも一貫性がない。加えて、文化や時代、性別によっても「人と動物との関係」は異なってくる。このことが人間同士の対立を深めたり、軋轢を生むことさえある。

ここでは、同志社大学社会福祉学会誌に掲載された筆者の報告書（佐藤, 2014）より、「人と動物の関係」性の一貫性のなさについて紹介する[1]。

2013年に米国テネシー州のノックスビルで開催された国際獣医療ソーシャルワークサミット（International Veterinary Social Work Summit in 2013）シンポジウムに登壇した、アメリカの社会心理学者のヘルツウォーク博士（Dr. Hal Herzog）の講演内容を紹介する。ヘルツウォーク博士は、人間の動物との関係性には一貫性がないことを菜食主義者及び動物権利擁護活動家に関する実証的データを用いて明らかにした。ヘルツウォーク博士は、人々がペット、害獣、食肉をどのように線引きするかは文化によって異なると主張する。例えば米国では、多くの人々にとって犬はペットであり家族の一員として扱われるが、別の国では番犬であり、家族の一員ではない。またある国では、犬はペットとして扱われる一方で食用としても市場に流通している。また、同じ文化圏にいてもその線引きは人によって異なる。例えば、自分の飼い猫を目の中に入れても痛くないほど可愛がっている男性が、アザラシの頭をバットで一撃して殺すことに何の罪悪感も抱かない。また、肉牛を食べることに何の躊躇もない一方で、イルカ漁には反対する人々など、動物に対する人間のスタンスや道徳的判断基準は流動的であり、性別、文化、言語、信条等が異なる場合、相手のことを全く理解できないという状況にしばしば陥る。

米国では動物の権利擁護運動が盛んであり、菜食主義者への配慮も高い。そんな中､ヘルツウォーク博士は、人と動物との関係における道徳的一貫性を保つことの難しさを菜食主義者の事例を挙げて説明した。例えば、米国農務省の食事に関する電話調査では､「自分は菜食主義者だ」と答えた者のうちおよそ３分の２が、24時間以内に肉（flesh meat）を食べたと回答したという。また、魚介類や卵、乳製品は許容範囲であるという菜食主義者も存在する。このように、一般人から見ると「菜食主義」という言葉と実際の行動が一致しない不可思議な現象が起こっている。また、動物権利擁護活動家や菜食主義者の中には、その強すぎる信念とそれに基づく行動が親しい友人を遠ざけたり、夫婦関係に亀裂を生じさせたりと、理想と現実を一致させるために非常に多くのことを犠牲にしていると指摘している。

では、我が国に目を向けてみると、どのようなことが起こっているのだろうか。現在、全国各地で「地域猫活動」なるものが展開されている（環境省, 2016）。これは、飼い主を特定できない猫に、餌を与える住民とそれ以外の住民の間で起こっている生活問題を解決することを目的とした、住民、ボランティア及び行政の三者が協働して行ってい

る活動である（環境省, 2016）。地域で徘徊している不特定多数の猫にやみくもに餌を与え、また、餌を与えた後のゴミ処理をせず、不妊手術を施さなければ何が起こるだろうか。現在、日本各地で起こっているのは、ゴミを食い荒らすネズミやゴキブリ等の大量発生、飼い主の特定できない猫の爆発的な増加、発情期等の生活騒音、また、公園等の砂場への排泄物の堆積等であり、地域の安全や美観を損なっていることに警鐘を鳴らす住民も少なくない。公益財団法人動物基金によれば、前述した「地域猫活動」とは、TNR（Trap, Neuter, Return）活動とほぼ同義であり、増えすぎた飼い主のいない猫を捕獲し（Trap）、不妊手術（Neuter）を施した後、元の場所に返し（Return）、餌を与える人間が責任をもって食事や排泄物の後片付けをし、地域住民はそれを見守り、行政は地域への啓発普及に努めるという一連の手続きを指す。その結果、猫は一代限りの猫生をまっとうし、地域の猫の総数も年を追うごとに減っていく。このように、「地域猫活動」は、飼い主のいない猫の繁殖や住民間の対立を防ぐための方法として普及している。

これらは一見すると「**動物の問題**」であるが、そもそも飼い主のいない猫が発生したのは、飼い主の飼育放棄、もしくは飼い主が責任をもって飼育管理を行わなかったことが原因であり、当該猫の存在や行動を巡って対立しているのは**人間**である。猫は、人間を困らせようとして喧嘩をしたり、庭に排泄したり、子孫を増やしているのではない。猫はその日その日の猫生をまっとうするために、行動しているだけである。このように考えると、「地域」における飼い主のいない猫に関する問題とは、**人間同士の感情的な対立やトラブル**であるといえるかもしれない。そうであるならば、当該問題への介入は、コミュニティの福利に関わるソーシャルワーク援助の対象となると考えられる。

では、米国及び我が国におけるペット飼育率はどのようなものであろうか。以下は、松山大学論集に掲載された筆者の論文（佐藤, 2017）からの知見である[2]。

全米ペット製品協会の調査（American Pet Products Association [APPA], 2015）によれば、全米の65％の世帯（7,970万世帯）が少なくとも１頭のペットを飼育している。我が国においても、犬の飼育世帯は全世帯の14.2％、猫の飼育世帯は全世帯の9.9％にのぼる（一般社団法人ペットフード協会, 2016）。また、我が国における別の調査（保険クリニック, 2015）では、回答者の30.4％がペットを飼育していると答えている。このように少なく見積もっても、米国では３世帯のうち２世帯が、我が国では４世帯のうち１世帯がペットを飼育している。さらに、APPA（2015）では、全米の犬・猫の飼育総数は9,700万頭であるが、それに対して17歳以下の子どもの総数は7,360万人（Child Stats.gov, 2016）となっており、ペットの総数が子どもの総数を上回っている。この傾向は現在も続いている。わが国では、2016年度における犬及び猫の飼育数は1,972万５千頭（一般社団法人ペットフード協会, 2016）であり、2016年度の18歳未満の子どもの数（1,935万８千人〔総務省統計局, 2016〕）と比較すると、ペット飼育数が子どもの数を上回っている。

内田（2001）は、「ペットがコンパニオン・アニマルと呼ばれる時代が到来し、人間と飼育動物とのきずなが強く結ばれるようになった現在、ペットの家族における位置を飼い主に尋ねるならば『パートナー』『子ども』『家族の一員』という答えがほとんどであろう」(p. 200) と述べている。また、横山（2005）は、日本人の動物観に関する二つの調査（亀山, 石田, 高柳, 若生, 1992; 石田, 横山, 上條, 赤見, 赤見, 若生, 2004）の比較分析を行い、この10年間における日本人の12種類の動物観（「家族的態度」、「生態的態度」、「自然的態度」、「倫理的態度」、「宿神的態度」、「審美的態度」、「分析的態度」、「支配的態度」、「実用的態度」、「開発的態度」、「否定的態度」、「無関心」）の変遷について報告している。その結果、０～５の尺度内で「家族的態度」だけが３から４に上昇し、他の動物観は２から３の間を推移していることが明らかになった（横山, 2005）。つまり、飼い主は、自身のペットを重要な家族の一員とみなす傾向が強くなっていることが推測されるのである。

一般社団法人ペットフード協会（2013）が、犬・猫の飼い主に「生活に喜びを与えるもの」につい

て尋ねたところ、犬の飼い主では、「家族（82%）」が首位となり、「ペット（80%）」はそれに続き、「趣味（65%）」は第３位となった。猫の飼い主では、「ペット（82%）」が首位であり、次いで「家族（78%）」、「趣味（70%）」の順であった。この調査が「家族」をどのように定義したのかは不明であるが、少なくとも回答者は、ペットを人間の家族メンバーと同じくらい生活に欠かせないものかそれ以上と捉えていることがわかる。

では、災害等が起こった際に、飼い主は自身のペットをどのように扱うのであろうか。米国ニューヨーク市の大規模動物病院に通うペット飼育者の調査（Cohen, 1998）では、緊急時にはペットを最優先して救助すると回答した人（44％）が、自身のパートナーを最優先すると回答した人（32％）よりも多かった。災害時には、ペットを残して人間だけが避難することを拒否する人々が少なからず存在する。2005年に北米大陸をハリケーン・カトリーナが通過した際には、ペットを飼育している人々の多くが、ペット可のシェルターやホテル、公共交通機関を探すことが困難であったため、ペットと家に留まることを余儀なくされた（Anderson et al., 2006）。また、家庭内暴力の被害女性は、彼らが大事にしているペットに加害者が危害を加えることを恐れて、家に留まる例が多数報告されている（Faver et al., 2003a, 2003b）。入院している高齢者は、ペットのことを心配するあまり、病気から十分回復する前に、退院を決意することもある（Ebenstein et al., 2001）。このように、ペットの生命や幸福（well-being）を自分の幸福よりも優先する飼い主は少なくない。

一方、我が国のペットのための防災対策はどのように進められているのだろうか。前述の一般社団法人ペットフード協会（2013）によれば「家庭どうぶつのための防災対策」に関する問いに対して、65％の飼い主がキャリーバッグやリード等を「準備している」と回答し、同行避難を意識していることが伺える。また環境省（2013）は、災害時のペット同行避難のためのガイドラインを発行している。また、2018年の西日本豪雨で甚大な被害に遭遇した岡山県倉敷市では、市立穂井田小学校の体育館にペット同伴者専用の避難所を準備した。動物が苦手な人や動物アレルギーの人々とのトラブルを避けるために、他の自治体を転々としてきた真備町地区の住民に倉敷に戻ってもらおうために計画されたものである（産経新聞, 2018）。また、岡山県総社市の片岡市長は、「ペットは家族」とtwitterで公言し、ペット避難所をいちはやく設置した（Grape, 2018）。このように、我が国においても、ペットは非常時でさえ、家族内で重要な位置を占めているといえる。

飼い主にとって、ペットは重要な情緒的サポートの源である（Beck, A. & Katcher, 1983; Cohen, 1998, 2002; Johnson & Meadows, 2002; Kidd & Kidd, 1985; Melson, 2001; Risley-Curtiss, Holley, Cruickshank et al., 2006; Risley-Curtiss, Holley, & Wolf, 2006; Stammbach & Turner, 1999; Triebenbacher, 2000）。人々は動物との交流によって癒されることがある。ペットは飼い主を批判しないばかりか、飼い主からの最小限の愛情や注意だけで十分に幸福と感じてくれるからである（Cohen, 1998, 2002; Triebenbacher, 2000）。

複数の欧米の研究者（Lagoni, Butler & Hetts, 1994; Toray, 2004; Turner, 2003）が、人とペットとの絆が飼い主に与える影響を愛着理論に基づいて説明を試みている。愛着（Collin, 1996）は、「個人の一生を通じて継続する情緒的な絆であり、ストレス下において特定の愛着対象を捜し求め、近接性を希求する傾向にその特徴が認められる。」（p. 7）と定義されているが、元来は乳児とその養育者（主として母親）との間に結ばれる永続的な情緒的絆であると理解されてきた（Ainsworth, 1973; Bowlby, 1969/1982; Colin, 1996）。ペットの存在やその関係性が、飼い主に「居心地の良さ」や「守られている」という感覚、すなわち、安全・安心の感覚や信頼感をもたらしているとすれば、その飼い主は、愛着対象としてのペットから情緒的な安定を得ているといえよう。人と動物の絆の研究の第一人者である米国の児童精神科医のレビンソン（Levinson, 1978）も、ペットを飼育することは、飼い主の自己概念形成を促し、自己評価や自立性、共感性を高めることを指摘している。

このように、ペットの飼い主は、自身のペットを人間の家族メンバーと同等かそれ以上に重要な

ものと捉えていることがわかる。概して、ペットに関する生活課題の解決は、飼い主の幸福（well-being）に直結しているため、このようなクライエントはソーシャルワークの援助対象であると考えられる。

(b) ペット・ロスによる悲嘆を経験している飼い主への専門的援助の実際

人生において、出会った大切な人々との別れはつきものである。とりわけ自分にとって重要な他者との別れは、自分自身の心や身体を引き裂くように感じられるかもしれない。苦しんでいる時も悲しんでいる時も、また喜びにあふれている時も、無条件に我々の側に立ち、支えてくれた人々が亡くなったり、どこか遠くへ行ってしまったり、生死さえ分からない時、人々はどのような感情を抱くだろうか。その人が自分の世界から消えていくことを阻止することができなかったという自責の念や、大切な人にもう一度会いたいという思慕、彼らを救えなかった医療関係者への怒り、この世界に一人残されたという孤独感が一気に残された人々の元に押し寄せてくるかもしれない。このように、重要な他者を失った悲しみを経験している人々の感情表出を促し、失った重要な他者との関係を内在化し、その関係を再構築することによって、日常生活をその人らしく生きられるよう援助する専門職が存在する。ソーシャルワーク援助職もそのような機能を担っていると考えられる。

ソーシャルワーク援助職の元を訪れる人々が抱える問題には、人生における何等かの喪失が関わっていることが多い。家族の死、友人との別れ、ペットの死、失恋、離婚、受験や就職の失敗、テロや災害による突然の別れ等、人は人生のあらゆる時期や場面において、愛着関係にある人やペット、モノとの別れを繰り返し経験している。ここでは、ソーシャルワーク実践の中では見過ごされてきた「人と動物の関係」、中でもペットを重要な家族の一員と見なし、愛着を持って生活している飼い主に焦点を当て、飼い主が自分のペットを失った場合、どのようなことを経験しているのか、また、ペットを失った際に飼い主が感じるストレスは、重要な他者としての人間を失った場合のストレスとどのように異なるのかについて概観する。

以下、松山大学論集に掲載された筆者の論文（佐藤, 2017）からの知見を紹介する[3]。

米国の心理学者であり、急性悲嘆反応を呈している人々への専門的援助・調査研究をおこなってきたワーデン（Worden, 2002）は、**悲嘆**を「**愛する人を死によって失った人の経験**」（p.10）であると定義している。米国州立テネシー大学において展開されている獣医療ソーシャルワーク資格プログラム（Veterinary Social Work at University of Tennessee Certificate Program [VSWUT-CP], 2015）では、ペットの飼い主に現れる胸の締め付けや睡眠障害、食欲不振等の「身体的反応」や、怒り、悲しみ、抑うつ等の「心理的・精神的反応」、混乱、幻覚、集中力の欠如等の「知的・認知的反応」は、重要な他者（人間）を失った人々が経験する悲嘆反応と似通っていると指摘している（Netting, Wilson, & New,1987; Quackenbush & Glickman, 1984; Crocken, 1981）。

ペット・ロスを経験している飼い主が辿る悲嘆プロセスには、キューブラーロス（Kubler-Ross, 1969）の**５段階モデル**（否認、怒り、取引、抑うつ、受容）やワーデンの**課題モデル**（喪失の事実を受容する、悲嘆の苦痛を処理する、個人のいない新しい環境に適応する、死者を情緒的に再配置し、喪失したものを忘れることなく生活を続ける）等がある。重要な他者としてのペットを喪失したことによる悲嘆を経験している人々は、これらの段階や課題、プロセスを行きつ戻りつしながら、重要な他者（ペット）のいない世界を受け入れ、日常生活に再適応していく。

一方で、ワイズマン（Weisman, 1991）は、飼い主にとってのペット・ロスにより引き起こされる悲嘆への対処は、重要な他者（人間）を失った際の対処よりも困難であると指摘している。飼い主にとっては、必要な時に変わらぬ態度で接してくれるペットは特別な存在であり、代わりを見つけることは難しい。また、ほとんどのペットの寿命は、人間の寿命よりも短いため、飼い主は人生の中で必ずといっていいほど、大事なペットの喪失を経験する（Morley & Fook, 2005; 横山, 1996）。**飼い主がペットの安楽死を決め実行した場合や、ペッ**

トの生死が明らかではない場合、周囲の人々がペット・ロスに関わる悲嘆を理解しない場合、度重なるストレスフルな出来事とペット・ロスが重なって起こった場合、また、ペットとの愛着関係が深い場合は、残された飼い主の悲嘆反応が長引いたり、延期される等、悲嘆が深刻化する可能性がある（Barnard-Nguyen, Breit, Anderson, & Nielsen, 2016; Planchon, Templer, & Strokes, 2002）。

にもかかわらず、ペットを失った飼い主の悲しみが深く激しいものであることへの社会的な認識や理解が十分でないため、飼い主が適切な時期に悲嘆反応を表出することには困難が伴う。つまり、現今の社会では、動物との相互作用は人間同士のものと比べてあまり重要でないと考えられているため、ペットを失った際の悲嘆作業を進めるためのサービスはあまり存在しない（Morley et al., 2005）。また、対人援助専門職の多くが、ペット・ロスによる悲嘆を経験している飼い主の悲嘆を矮小化する傾向があり、そのことが飼い主をますます追い詰め、その悲嘆反応を遅延・長期化させ、日常生活に再適応することを困難にさせているという報告もある（Hart, Hart, & Mader, 1990; Weisman, 1991）。対人援助専門職者は、飼い主がペットに期待する役割や愛着の程度、ペットとの関係には個人差があることを理解した上で、ペットを失った人々が、悲嘆から日常生活に復帰するためには何が必要なのかを見極め、支援の方向性を探る必要がある。

シャーキンとノックス（Sharkin & Knox, 2003）は、心理学者等の対人援助専門職は、ペットへの愛着が飼い主の生活の質に与える影響や、飼い主にとってのペットの役割を理解し、臨床場面において、ペットの価値を認識し敬意を表す必要性を指摘している。つまり、ペットを失った人々に対する悲嘆カウンセリングの最初期には、ペットを失ったことによる飼い主の悲嘆を承認・妥当化することが求められる（Sharkin et al., 2003）。飼い主が喪失に関わる事実や感情を整理し、喪のプロセスを遂行することを促すためには、ペットに関連する質問を準備しておくことが重要である（表１を参照）。

表1　飼い主のペットとの愛着関係を査定するための質問（Toray, 2004, p.249を、筆者が表として再編した〔佐藤, 2017, p.69より転載〕）

01. クライエントの対処能力を確認するために、過去及び現在のペット飼育歴に関する情報を集めること
02. クライエントの生活においてペットがどのような役割を果たしている（た）のか（例：孤独の回避、話し相手）
03. クライエントはペットをどのように呼ぶのか（ペットの名前で、親友として）
04. クライエントは自分のペットを家族の一員として考えているのか、あるいは子どものように捉えているのか
05. クライエントは他の家族メンバーや友人よりも、ペットを近しいものとして感じているのか
06. クライエントは彼・彼女の生活におけるペットの意味について理解している友人や家族メンバーを持っているか
07. クライエントは彼・彼女のペットと同じ病気で死んだペットを飼っていた友人や家族メンバーを持っているか
08. クライエントに子どもがいるのなら、彼らの子どもとそのペットとの関係はどのようであったか
09. クライエントはペットを情緒的サポートの拠り所としていたのか
10. クライエントはペットを安楽死させたのかどうか、その手続きに関してクライエントはどのような経験をしたのか
11. クライエントがペットの死を経験しているのなら、その死はどのような状況で起こったのか（例：事故、自然死）
12. ペットの死は、クライエントに近しい人の死以上のものをもたらしているのか

このように、目の前にいるクライエントに対して、「その人の生活における重要な他者」を査定する際に、ペットについても尋ねることが求められるかもしれない（Sharkin et al., 2003）。目の前にいるクライエントの症状や問題が、ペット・ロスによって引き起こされている場合には、**クライエントをサポートすることが可能な周囲の人々のリストを作成**したり、**ペットの死後の埋葬方法について話し合う機会を提供**したり、**ペット・ロスに関する文献を紹介する**等の援助が有効である（Sharkin et al., 2003）。これらの援助は、飼い主がペット・ロスにまつわる自身のストレス反応を理解し、そこから回復し、ペットのいない現実に再適応することを促す（Sharkin et al., 2003）。表２は、ペット・ロスによる悲嘆を経験している飼い主へのサポートの一覧である。

表2　ペット・ロスによる悲嘆を経験している飼い主へのサポート（Turner, 2003, p.76を表として再編・加筆〔佐藤, 2017, p.70より転載〕。）

ソーシャル・サポートの提供	「ばかげた」、「気が狂っている」と感じている飼い主に対して、彼らの経験は正常な悲嘆反応であると伝え、不安を軽減させること。	
ペット・ロスに関する語りの受容	ペットを失った際の感情や考えを言語化することそのものに、治療的効果がある。家族や友人が耳を貸さないことが多いため、対人援助職による積極的な傾聴は、ペット・ロスによる心理的・社会的・認知的変化や影響を飼い主自身が整理することを促す。	
問題解決や意思決定への支援	課題	注意事項
	（1）子どもに、ペット・ロスをどのように伝えるのか	発達年齢を考慮すること
	（2）次のペットを迎えるべきか否か	喪のプロセスの進行具合を査定すること、新しいペットの名前や種類を、失ったペットと同様にするのかを熟考すること
	（3）遺されたペットにはどのように接し何をすべきか	遺されたペットも、悲嘆を経験する
	（4）病気のペットを安楽死させるべきか	ペットが感じている苦痛の度合いや文化によって異なる
	＊正しい答えは存在しないが、対人援助専門職は、動物関連の知識を持つことが求められる。	

以上のように、ペット・ロスによる悲嘆の場合は、周囲の人々に認知されることが少なく、またインフォーマルなサポートを受けることが難しいため、それが**正常な範囲の悲嘆**であっても、悲嘆カウンセリング等の専門的な援助の対象になり得る。ただ、エイドリアンら（Adrian, Deliramich & Frueh, 2009）やターナー（Turner, 2003）が指摘しているように、対人援助専門職は、**「人と動物の関係」をどのように捉えるかは飼い主によって異なる**ことを理解する必要がある。ある飼い主は、ペットを人間のように捉えたり扱ったりするが、そうでない飼い主も存在する。つまり、対人援助専門職者は、飼い主がペットに期待する役割や愛着の程度、ペットとの関係には個人差があることを理解した上で、ペットを失った人々が、悲嘆から日常生活に復帰するためには何が必要なのかを見極め、支援の方向性を探る必要がある。

(c) ソーシャルワーカーが持つ男らしさ・女らしさに関する価値意識が、ペット・ロスによる悲嘆を経験している（特に男性の）飼い主の行動や感情表出にどのような影響を及ぼすのか

2013年に東京大学弥生講堂で開催された「ヒトと動物の関係学会」の第19回学術大会では、「猫がジェンダーを超えるとき－男が猫を飼う心理－」と題したシンポジウムが開催された。シンポジストの一人である室岡（2013a）は、近年、男性が積極的に猫を飼う傾向について、(a) ペット飼育者数の増加、(b) 晩婚化等による独身者数の増加、そして（c）人間関係等の問題を抱える人々の増加を挙げている。

まず、室岡（2013b）は、(a) のペット飼育者数の増加について、近年のペットブームが引き起こした飼育者数の増加が、猫を飼う男性の増加につながったのではと指摘している。ペット飼育者の増加が、飼育環境の整備や飼育情報の大量伝達を促し、その結果、「ペットを飼いやすい環境」が整い、猫を飼う男性が増えたとも考えられる（室岡, 2013b）。ペットブームのおかげで、飼育用品は通信販売で購入可能になったり、またネット上では、猫の飼い方や病気への対処に関する情報が豊富にあり、最近では動物病院やペットホテルも充実している。ペットの飼い主である男性が会社勤めで忙しくても、猫を飼うことのハードルは下がるかもしれない。

次に、室岡（2013a, 2013b）は、(b) の晩婚化等による独身者数の増加により、猫好きの妻や子どもの後ろに隠れていたはずの猫好き男性が、顕在化してきたのではないかと指摘している。家族で飼っていれば、「妻子の願いを叶えた男の顔」をしていることも可能だが、独身者が増えたことにより、そのような立場を維持できなくなり、猫好き男性がより顕在化してきたのかもしれないと指摘している（室岡, 2013b）。

最後に、室岡（2013b）は、(c) 人間関係等の問題を抱える人々の増加が、動物との暮らしを選択させ、ペットとの関係性の中で癒され、心身の安定を保っているのかもしれないと指摘している。また、多様な価値観が尊重される時代が到来し、いい歳をした独身男性が猫を飼うのはおかしいという偏見が消えようとしていることも、猫好き男性が顕在化している要因かもしれないと指摘している（室岡, 2013a, 2013b）。

また、別のシンポジストの遠矢（2013a, 2013b）は、経済至上主義の中で、企業戦士として主従関係にさらされている男性が、そこから逃避して癒されるには、個を重んじ自由に生きている猫はうってつけの存在かもしれないと述べている。遠矢（2013b）は、我が国においては、経済力を持ち、家族や国を守り、家事や育児までをもこなすスーパーマンのような男性を求める社会構造や、自殺者の75％が男性であることを引き合いに出し、猫が男性飼育者を癒す理由を（１）下心型、（２）恋人代行型、（３）脱ボス社会型に分類している。遠矢（2013b）は、（１）の下心型では、女性に認めてもらうために猫好きになったが、猫との交流プロセスを通してその存在や関係性に魅了されていった男性、（２）の恋人代行型では、恋人や妻からのサポートを得られず、代わりに猫から癒しを求める男性、（３）の脱ボス社会型では、弱肉強食の縦社会や家庭における経済的責任という重圧の中で、個を重んじる猫の生き方に魅せられ癒されている男性に分類している。

ペットを家族の一員として捉え、日常生活を送っていた人々にとって、ペットの死は衝撃的な出来事となり、飼い主の悲嘆を引き起こす。そのような悲嘆を共有し、表出するための資源として、自助グループが存在している。我が国には、ペット・ラバーズ・ミーティング（Pet Lovers Meeting〔PLM〕）というペット・ロスによる飼い主の悲嘆を共有するための自助グループが存在している。この会合は、ペットの抗がん治療のため日本獣医畜産大学付属病院（現日本獣医生命科学大学付属動物医療センター）に通っていた飼い主らによって1999年に組織されたもので、2000年に２回、2001年以降は年４回、１回２時間という設定で開催されている（PLM, 2017）。筆者は同グループミーティングに過去に３度、観察者として参加した（2017年３月〔参加者16名〕、2018年６月〔参加者13名〕、2019年３月〔参加者７名〕）が、男性の参加は１名のみであった。また、ある女性参加者

によれば、彼女らの配偶者や息子たちは、ペット・ロスにまつわる感情を普段あまり出さないことや、一方でその話題が持ち出されると、堰を切ったように激しい感情が表出されることを報告している。このように、男性は家族生活においても配偶者や母親、姉妹等の女性に配慮し、冷静に振る舞おうとする姿が窺える。男性は、ペット・ロスにまつわる自身の感情を抑制し、他者からのサポートを得ることが難しい状況に置かれていると考えられる。そうであるならば、なお一層、男性飼い主が、悲嘆を表出する場は重要となるであろう。

男性は社会が期待する「男らしさ」に囚われ、このような社会資源を活用することに戸惑いがあるのかもしれない。ソーシャルワーク援助職は、自身の男らしさ・女らしさに関する価値意識を自覚し、男性のペット飼育者にも、女性のペット飼育者に対するのと同様に、もしくはそれ以上に、悲嘆を表出する機会を提供することが求められる。

このような状況の中で、ペットが重要な他者となっている飼い主の場合、ペット・ロスは、心身の健康に大きな影響を及ぼすと考えられる。ソーシャルワーク援助職がペット・ロスによる悲嘆を経験している飼い主（特に男性）にアウトリーチを行い、相談に乗る可能性は、今後ますます多くなっていくと考えられる。

４．おわりに

ソーシャルワーク専門職は、人間の生活におけるペットの役割を理解し、ペットを失った際に飼い主が経験する悲嘆や喪のプロセスを妨げる要因についての知識を持ち、飼い主が失ったペットを自身の生活の中に再配置し、日常生活に再適応するための支援を行うことが求められる。また、援助者自身のジェンダーに関する価値意識を振り返り、飼い主の性別を超えたサービスを適切に提供する必要があろう。ペットとの関係性をクライエントの生態系内の重要な要素として捉え援助を行うことは、ソーシャルワークの価値に合致していることを認識し、支援を展開していく必要がある。

参考文献

Adrian, J. A. L., Deliramich, A. N., & Frueh, B. C.(2009). Complicated grief and posttraumatic stress disorder in human's response to the death of pets/animals. *Pet Loss and Bereavement, 73*(3), 176-187.

Ainsworth, M. D. S.(1973). The development of infant-mother attachment. In B. M. Caldwell & H. Ricciuti(Eds.). *Review of child development research, Vol.3,* (pp. 1-94). Chicago: Chicago University Press.

American Pet Products Association.(APPA).(2015). *2015-2016 APPMA national pet owners survey*. Greenwich, CT.

Anderson, A., & Anderson, L.(2006). *Rescued*. Novato, CA: New World Library.

Barnard-Nguyen, S., Breit, M., Anderson, K.A., & Nielsen, J.(2016). Pet loss and grief: Identifying at-risk pet owners during the euthanasia process. *Anthrozoös, 29*(3), 421-430.

Beck, A., & Katcher, A. H.(1983). *Between pets and people: The importance of animal companionship*. New York: G. P. Putnam and Sons.

Bowlby, J.(1969/1982). *Attachment and loss: Vol. I. Attachment*. New York: Basic Books.

Child Stats.gov.(2016). Pop1 child population: Number of children(In millions)ages 0-17 in the United States by age, 1950-2015 and projected 2016-2050. Retrieved 5/19/2017 from http://www.childstats.gov/americaschildren/tables/pop1.asp

Cohen, S. P.(1998). The role of pets in some urban American families. *Dissertation Abstract International-A*, 59/10.(UMI No. 9910568).

Cohen, S. P.(2002). Can pets function as family members? *Western Journal of Nursing Research, 24*(6), 621-638.

Colin, V. L.(1996). *Human attachment*. New York: McGraw-Hill.

Coren, S.(1997). Allergic patients do not comply with doctor's advice to stop owning pets. *British Medical Journal, 314*, 517.

Crocken, B.(1981). Veterinary medicine and social

work: A new avenue of access to mental healthcare. *Social Work in Health Care, 6*(3), 91-94.

Ebenstein, H., & Wortham. J.(2001). The valueof pets in geriatric practice: A program example. *Journal of Gerontological Social Work, 35*(2), 99-115.

Faver, C. A., & Strand, E. B.(2003a). Domestic violence and animal cruelty: Untangling the web of abuse. *Journal of Social Work Education, 39*, 237-253.

Faver, C. A., & Strand, E. B.(2003b). To leave or to stay? Battered women's concern for vulnerable pets. *Journal of Interpersonal Violence, 18*(12), 1367-1377.

Grape（2018)「ペットは家族だから：被災した市長の投稿に全国から賞賛の声」https://grapee.jp/531045（2019年5月27日閲覧）

Hart, L. A., Hart, B. L, & Mader, B.(1990). Humane euthanasia and companion animal death: Caring for the animal, the client and the veterinarian. *Journal of American Veterinary Medical Association, 197*, 1292-1299.

保険クリニック(2015)「保険を学ぶ：IQくんのなんでも調査隊：ペット保険にはほとんど加入していない！（アンケート概要：サンプル数500名、20 ～ 60歳、Webアンケート、2015年2月26日 ～ 3月3日 実 施)」https://www.hoken-clinic.com/teach/expedition/detail10.html （2017年5月19日閲覧）

一般社団法人ペットフード協会（2013)『平成25年度全国犬・猫飼育実態調査結果』http://www.petfood.or.jp/topics/img/140101.pdf（2017年5月19日閲覧）

一般社団法人ペットフード協会（2016)『平成28年度全国犬・猫飼育実態調査結果』http://www.petfood.or.jp/topics/img/170118.pdf （2017年5月19日閲覧）

石田戢・横山章光・上條雅子・赤見朋晃・赤見理恵・若生謙二（2004)「日本人の動物観　この10年間の推移－」『動物観研究』8, 17-32.

Johnson, R. A., & Meadows, R. L.(2002). Older Latinos, pets and health. *Western Journal of Nursing Research, 24*, 609-620. King, L. C., & Werner, P. L.(2011). Attachment, social support, and responses following the death of a companion animal. *OMEGA, 64*(2), 119-141.

亀山章・石田戢・高柳敦・若生謙二（1992)「日本人の動物に対する態度の特性について」『動物観研究』3, 1-24.

環境省（2013)『人とペットの災害対策ガイドライン』https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3002/0-full.pdf（2019年5月25日 閲覧）

環境省（2016)『(参考)引き取り数削減に向けたその他の取組』https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h2806a/pdf/05_01.pdf（2019年5月25日閲覧）

Kidd, A. H., & Kidd, R. M. (1985). Children's attitudes toward their pets. *Psychological Reports, 57*, 15-31.

国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW, 2014)『ソーシャルワーク専門職のグローバル定義と解説』https://jacsw.or.jp/06_kokusai/IFSW/files/SW_teigi_01705.pdf（2018年7月20日閲覧）

公益財団法人動物基金（n.d.)『さくらねこ♥TNRとは』https://www.doubutukikin.or.jp/activity/campaign/story/（2017年5月19日閲覧）

Kubler-Ross, E.(1969). *On Death and Dying*. New York: MacMillan Publishing.

Lagoni, L., Butler, C., & Hetts, S.(1994). *The Human Animal Bond and Grief.* Philadelphia: W. B. Saunders Co.

Levinson, B. M.(1978). Pets and personality development. *Psychological Reports, 42*, 133-146.

Melson, G. F.(2001). *Why the wild things are: Animals in the lives of children*. Cambridge, MA: Harvard University.

Morley, C. & Fook, J.(2005). The importance of pet loss and some implications for services. *Mortality, 10*(2), 127-143.

室岡一郎(2013a)「なぜ、男はネコと暮らすのか」『第19回ヒトと動物の関係学会学術大会抄録集 シンポジウム2 ／猫がジェンダーを超える時-男が猫を飼う心理』第34号, 23.

室岡一郎（2013b)「なぜ、男はネコと暮らすのか」

『第19回ヒトと動物の関係学会学術大会シンポジウム2／猫がジェンダーを超える時−男が猫を飼う心理』第36号, 43-47.

Netting, F., Wilson, C., & New, J.(1987). The human-animal bond: Implications for practice. *Social Work, 32*, 60-64.

Pet Lovers Meeting.(2017).『PLMについて：PLMの成り立ち』http://www.ddtune.com/plm/aboutus（2017年5月19日閲覧）

Planchon, L.A., Templer, D. I., Strokes, S., & Keller, J. (2002). Death of a companion cat or dog and human bereavement: Psychosocial variables. *Society & Animals, 10*(1), 93-105.

Quackenbush, J. & Glickman, L.(1984). Helping people adjust to the death of a pet. *Health and Social Work, 9*(1), 42-48.

Risley-Curtiss, C., Holley, L. C., Cruickshank, T., Porcelli, J., Rhoads, C., Bacchus, D.N.A., et al. (2006). "She was family" : Women of color and animal-human connections. *Affilia, 21*, 433-447.

Risley-Curtiss, C., Holley, L. C., & Wolf, S.(2006). The animal-human bond and ethnic diversity. *Social Work, 51*(3), 257-268.

佐藤亜樹（2014)「第3回国際獣医学ソーシャルワークサミット（International Veterinary Social Work Summit 2013)」『参加報告同志社社会福祉学』第28号, 168-177.

佐藤亜樹（2017)「ソーシャルワーカーの新しい機能：ペット・ロスが飼い主に与える影響とソーシャルワーク・サービスの可能性－先行業績レビューを通しての考察－」『松山大学論集』第29巻第2号, 47-81.

産経新聞（2018)【西日本豪雨】ペット同伴の避難所開設　屋内にケージ　岡山・倉敷 https://www.sankei.com/west/news/180721/wst1807210043-n2.html（2019年5月27日閲覧）

Sharkin, B. S. & Knox, D.(2003). Pet loss: Issues and implications for the psychologist. *Professional Psychology: Research and Practice, 34*(4), 414-421.

総務省統計局（2016)『統計トピックスNo.94　我が国のこどもの数－「こどもの日」にちなんで（「人口推計」から)』http://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/pdf/topics94.pdf（2017年5月19日閲覧）

Stammbach, K. B., & Turner, D. C.(1999). Understanding the human-cat relationship: Human social support or attachment. *Anthrozoös, 12*(3), 162-168.

Toray, T.(2004). The human-animal bond and loss: Providing support for grieving clients. *Journal of Mental Health Counseling, 26*(3), 244-259.

Turner, W. G.(2003). Bereavement counseling: Using a social work model for pet loss. *Journal of Family Social Work, 7*(1), 69-81.

遠矢家永子(2013a)「『男』がネコに癒されたいワケ」『第19回ヒトと動物の関係学会学術大会抄録集 シンポジウム2／猫がジェンダーを超える時-男が猫を飼う心理』第34号24.

遠矢家永子(2013b)「『男』がネコに癒されたいワケ」『第19回ヒトと動物の関係学会学術大会抄録集 シンポジウム2／猫がジェンダーを超える時-男が猫を飼う心理』第36号, 48-52.

Triebenbacher, S. L.(2000). The companion animal within the family system. In A. H. Fine(Ed.). *Handbook on animal-assisted therapy: Theoretical foundations and guidelines for practice.*(pp. 357-374). San Diego, CA: Academic Press.

内田佳子（2001)「動物の飼育とペット・ロス（喪失）症候群」岩本隆茂・福井至共編『アニマル・セラピーの理論と実際』培風館, 200-207.

Veterinary Social Work University of Tennessee Certificate Program [VSWUT-CP]. (2015). *Pet Loss & Grief Program Online Course Material*.

Weisman, A. D.(1991). Bereavement and companion animals. *Omega, 22*, 241-248.

Worden, J. W.(2002). *Grief counseling and grief therapy*(3rd ed.). New York, NY, Springer Publishing Company.

Weisman, A. D.(1991). Bereavement and companion animals. *Omega, 22*, 241-248.

横山章光（1996)『アニマル・セラピーとは何か』NHKブックス.

横山章光（2005)「第10回大会記念企画／ヒューマ

ン・アニマル・ボンド再考：人と動物の絆への想い」『ヒトと動物の関係学会誌』15, 8-16.

注

1. 佐藤亜樹（2014）「第3回国際獣医学ソーシャルワークサミット（International Veterinary Social Work Summit 2013）」『参加報告同志社社会福祉学』第28号, 168-177のヘルツウォーク博士による米国における菜食主義者と動物の権利擁護運動についての部分を引用している。
2. 佐藤亜樹（2017）「ソーシャルワーカーの新しい機能：ペット・ロスが飼い主に与える影響とソーシャルワーク・サービスの可能性－先行業績レビューを通しての考察－」『松山大学論集』第29巻第2号, 47-81のうち、日米のペット数、子どもの数、家族の一員としてのペットの役割、災害時のペットとの避難、情緒的なサポート源としてのペットの役割についての部分を引用している。
3. 佐藤亜樹（2017）「ソーシャルワーカーの新しい機能：ペット・ロスが飼い主に与える影響とソーシャルワーク・サービスの可能性－先行業績レビューを通しての考察－」『松山大学論集』第29巻第2号, 47-81のうち、重要な他者としてのペット喪失と悲嘆、悲嘆のプロセス、専門的援助の可能性についての部分を引用している。